

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月1日現在

機関番号：34414

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520212

研究課題名（和文）中世南都観音伝承の形成と展開に関する総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive studies on formation and development of Kannon's folklore in medieval times around Nara area

研究代表者

横田 隆志（YOKOTA TAKASHI）

大阪大谷大学・文学部・准教授

研究者番号：90403211

研究成果の概要（和文）：本研究では、未翻刻資料である天理大学附属天理図書館蔵『泊瀬深秘之事』を翻刻・紹介した。また長谷寺の天神信仰、興福寺の動向とも密接な関わりをもった長谷寺大念仏衆、神奈川県・称名寺蔵『長谷寺密奏記』の叙述と京の太子堂速成就院、奈良の室生寺、鎌倉の称名寺との関わり、長谷観音の台座石伝承の展開につき検討を加えた。

研究成果の概要（英文）：In this research, I introduced the text of "Hatsuse jinpi no koto", a collection of Tenri Library which has been unpublished data. And I studied about TENJIN's worship in Hasedra, Dainenbutsushu in Hasedera which had close relation with Kofuku-ji Temple, "Hasedera missoki", a collection of Shomyoji, which had close relation with Taishido-Sokujojuin-Temple in Kyoto, Muroji-temple in Nara, Shomyoji-Temple in Kamakura, and development of folklore about Hase Kannon's pedestal stone.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：中世文学

キーワード：中世文学・観音・南都

1. 研究開始当初の背景

南都は地理的には奈良盆地及びその周辺の地域を指し、藤原氏の氏寺興福寺の聖俗両面にわたる支配が強く及んだ範囲とほぼ重なる。南都の盛衰は藤原氏を介して都の政治的・社会的動向と連動し、貴族や僧侶による文学的営為と緊密に関係した。これをふまえ、南都をめぐる説話研究の有効性及び意義は中世文学研究の分野すでに広く承認・共有されつつあった。ただし、上記の研究テーマを

考える上で重要な位置を占める南都の観音寺院の説話伝承を把握については未解明の点が多く残されていた。

2. 研究の目的

上記の点をふまえ、本研究では中世南都の主要な観音寺院の伝承を収集するとともに、錯綜した様相さえ見せるそれらの観音伝承の影響関係を解明することを目的とした。

3. 研究の方法

東京大学史料編纂所・神奈川県立金沢文庫・国会図書館・愛知県西尾市岩瀬文庫・天理大学附属天理図書館等を中心に関連資料を調査した。特に金沢文庫では、中世南都観音伝承と特に関連をもつと思われる縁起類や神道書を調査し、本研究計画を推進する上で基礎的かつ重要な知見を得ることができた。また長谷寺では、修二会等の仏教儀礼につきフィールド調査を行った。

上記の調査をふまえ、研究論文を執筆した。その成果は、奈良国立博物館特別展図録や『金澤文庫研究』等で公にした。

4. 研究成果

本研究を通じ、下記の研究成果を公にした。

(1) 天理大学附属天理図書館での調査研究をもとに、同図書館蔵『泊瀬深秘之事』の翻刻(全文)を公にし、本資料のもつ意義につき考察を加えた。

『泊瀬深秘之事』は従来、中世南都の観音信仰を考える上でしばしば参照されてきた。かつて『泊瀬深秘之事』の本文の一部を紹介したのは永島福太郎氏である。同氏著『奈良文化の伝流』(目黒書店、昭和26年、初出昭和19年)142頁及び『豊山前史』(総本山長谷寺、昭和38年)10頁で引用された「日ハ泊瀬ヨリ出ル也」以下の本文がその一例であり、長谷寺開基の徳道が伊勢に参詣したこと、その地で伊勢の神宮寺として長谷寺を創建すべしとの託宣を得たこと、天照大神と長谷観音は同体であること、伊勢は「日」でありかつ観音でもあること等が記されている。しかし永島氏の著書においては『泊瀬深秘之事』そのものの説明はほとんどなく、唐突に本文が引用されている。実のところ本書は、長谷寺周辺の名所等の項目を列挙し、その上で名所の所在地や関連する伝承・和歌などを記した書である。例えば「日ハ泊瀬ヨリ出ル也」以下の本文は、泊瀬山の別称である「豊山」の解説から「扶桑」という言葉が導かれ、その「扶桑」とはなにかを説く文章の一節である。

上述の論考では、本資料にかんするこうした基礎的な書誌的事項及び概要を示し、その全文を紹介した。

(2) 奈良国立博物館で行われた特別陳列「初瀬にますは与喜の神垣 與喜天満神社の秘宝と神像」に際し、「長谷観音と天神信仰」と題する論考を発表した。長谷寺の縁起・説話にみる天神道真は、初瀬の地主神であるのみにとどまらず、縁起の作者や長谷観音の化現という重層的な役割をになう存在として形象されている。

天神が長谷寺に迎え入れられた正確な時期は明らかではない。ただ平安期に初瀬の地

主神とされた滝蔵権現と入れ替わるようにして与喜天神が前面に登場することをあわせて考慮するならば、今回の特別展示で初公開された天神坐像が製作された十三世紀中葉が初瀬の天神信仰をよりいっそう推進する時期であったことはまちがいない。

ところで天神坐像の墨書銘によれば、本像の製作を沙汰したのは「勸人(ママ)善阿弥陀仏」である。しかるに長谷寺本『験記』上巻巻末「長谷寺律宗安養院過去帳」には、建保七年(一二一九)の火災からの復興に尽力した勸進聖浄阿が「念仏三昧ノ道場」や往生院などを建てたとの記載が見出せる。往生院は長谷寺の修造・復興の拠点として重きをなし、弘安三年(一二八〇)に長谷寺が焼失したさい大勸進をつとめたのも往生院長老の過阿弥陀だった(弘安三年長谷寺建立秘記)。阿弥陀信仰をもつ聖とは、長谷観音の靈威を説き広めるとともに、寺の修造・復興に関わった勸進聖の謂にはかならないのだろう。

本論考では、上述のような浄土信仰色の濃い担い手によって天神道真が長谷寺の信仰世界に加えられ、靈地としての相貌が新たに変わったことについて論じた。

(3) 中世長谷信仰の担い手であった長谷寺大念仏衆の活動に関する論考を発表した。史料上は四十八人大念仏衆という集団の存在も知られてはいたが、長谷寺大念仏衆との区別は従来あいまいなままであり、両者を混同するような研究もまま見られるところであった。本研究ではその区別を明確にするとともに、長谷寺大念仏衆と本寺興福寺との関わりや中世南都における浄土教の展開、長谷寺の勸進活動との関連について言及した。

本論考を通じ見えてきたのは、長谷寺の勸進聖と浄土信仰との関わり方の深さとその具体相である。具体的には、長谷寺大念仏衆は浄土信仰に篤く、勸進活動にも熱心な僧侶集団であったが、その存在形態は、長谷寺往生院等を拠点とした勸進聖と重なる。そうしたことから、番帳(名簿)等が現存しないこともあり、推測によらざるを得ない点もあるが、長谷寺大念仏衆には往生院の勸進聖などが加わっていた可能性を提起した。また長谷寺の勸進聖の浄土信仰をふまえれば、勸進聖との関連が指摘される『長谷寺験記』に往生説話が多い理由も理解しやすくなることもあわせて指摘した。

また本論考では承安年間に起きた興福寺による多武峰焼き討ちに関する説話にも分析を加えた。この件で興福寺大衆は、自分たちは焼いていない、焼いたのは多武峰側だと一貫して主張していた。だが多武峰の諸院諸堂を焼いたのは「奈良ヨリ」発向した軍勢だと認識する点において、また長谷観音がそれを「逆罪」と断じる点において、さらには地

中深く金輪から三つの枝に分かれ伸びてきたとされる観音の台座石が「サキアガリテ」男の参籠を拒絶するという異例の靈威が描かれる点で、『長谷寺験記』の叙述は興福寺大衆の認識と乖離している。最後に長谷観音を拝見できたという善果が語られていることなど、本話には興福寺大衆を刺激しないためのしかるべき配慮も認められるが、軍兵を派遣し敵対勢力の本拠地を焼き払う本寺の行動を長谷寺の僧がよしとしていたとは考えられない。本寺興福寺の威圧的な行動に批判的な視線がなければ、そもそもこのような説話が生まれ、伝承されるはずがないことを論じた。

中世の長谷寺が南都の大寺興福寺の支配下にあったことはすでに知られているとおりだが、一方的な支配・被支配の関係があったわけではない。そのことを改めて指摘した本論考を通じ、当初の研究目的であった中世南都の観音信仰をめぐるネットワークの一端の解明に貢献できたものと考えている。

(4) 長谷寺の神道書として重要な位置を占める称名寺本『長谷寺密奏記』は、神奈川県立金沢文庫に現存最古写本が所管されるが、その本文や奥書はいまだ検討されてこなかった。しかるにそれらの分析を通じ、本書に叙述された秘説が、長谷寺だけにとどまらず、京の太子堂速成就院、奈良の室生寺、そして鎌倉の称名寺等に展開したことなどが明らかになった。

『長谷寺密奏記』は天照大神と長谷観音が同体であることを説き、その叙述には錫杖の具備等、図像的特徴に関する内容も含まれていた。称名寺本『大神宮一長谷秘決』には長谷観音と天照大神との同体説が室生寺で受容されたことが示されているが、それは『長谷寺密奏記』の所説が室生寺に至り着いていたことを示唆する。ここで想起されるのは『長谷寺密奏記』の最古写本である称名寺本が正和三年(一三一四)長谷寺往生院で書写され、正和四年(一三一五)東山太子堂即成就院で改めて書写されていたことである。

『長谷寺密奏記』は秘書の扱いを受けてはいたが、披見と書写を許されることはあった。そして円海は「太子上人」と称されたごとく、東山太子堂即成就院を拠点の一つとしていた形跡がある。こうしたことをふまえて本論考では、『長谷寺密奏記』と『大神宮一長谷秘決』の所説が重なっている背景として、『長谷寺密奏記』の所説が即成就院あるいは円海を介して室生寺に至り着き、御流神道形成の一端に与ったという道筋を提示した。

一方、長谷寺の側から見れば、錫杖を執る長谷観音の姿は天照大神と同体なのだとする言挙げが、長谷寺以外の場で受容され、それをもとに新たな秘説が生み出されようと

したことが重要である。先述したように『大神宮一長谷秘決』は伊勢・長谷寺・室生との紐帯を説くが、本書成立の場がおそらくは室生寺であることを鑑みれば、長谷観音と天照大神との同体説を前提として、そこに室生寺の宝珠を重ね合わせたとみるべきである。『伊勢大神宮御体』が奥砂子平法の本尊として、天照大神・愛染明王・十一面観音の合尊説を掲げ、しかもその十一面観音が長谷寺式十一面観音像の図像的特徴を兼ね備えていることは、御流神道の形成にあたり長谷観音に関わる秘説を取りこもうとする営みの一環として把握することができる。以上のことから、本論考では、長谷観音と天照大神との同体説をいかに広めるかという意味で『密奏記』の模索はここに一定の実をあげたと評価されることを指摘した。

本論考は、科研のテーマである中世南都観音信仰の展開の一端を明らかにしたものであり、当初の研究計画で予定していた課題をひとつ解決できたものと考えている。この研究成果は『金澤文庫研究』(査読付)に掲載した。

(5) 長谷観音の台座石の問題を扱った。金輪際から生じたというその台座石は、歴史の展開の中でさまざまな秘説をうみだした。そのことは長谷信仰の独自性を示すものだが、他の聖地でも類似する伝承が語られる。本年度はその問題を考察する上での、いわば基礎固めとなる論考を『大阪大谷国文』誌上に公にした。

なお本研究計画の実施を通じ収集した資料及び知見は、平成25年度大阪大谷大学・特別研究費「長谷観音伝承の形成と展開に関する総合的研究」で発展的に継承する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 横田隆志、(資料紹介) 天理大学附属天理図書館蔵『泊瀬深秘之事』、大阪大谷国文、41、2011、58-68
- ② 横田隆志、長谷観音と天神信仰、奈良国立博物館特別陳列図録・初瀬にますは与喜の神垣 與喜天満神社の秘宝と神像、2011、12-13
- ③ 横田隆志、長谷寺大念仏衆の動向、大阪大谷国文、42、2012、54-75
- ④ 横田隆志、速成就院伝来『長谷寺密奏記』

と奥砂子平法、金澤文庫研究、査読有、329、
2012、1-11

- ⑤横田隆志、長谷観音台座石伝承の展開、大
阪大谷国文、43、2013、62-86
〔学会発表〕（計0件）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横田 隆志 (YOKOTA TAKASHI)
大阪大谷大学・文学部・准教授
研究者番号：90403211

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：